



Title	探求の共同体(The Community of Inquiry) : ティム・スプロッドによる概要
Author(s)	スプロッド, ティム
Citation	臨床哲学. 2005, 6, p. 93-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8761
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

探求の共同体 (The Community of Inquiry)

ティム・スプロッドによる概要

ティム・スプロッド (Time Sprod)

斉田 裕之 訳

探求の共同体とは、子どもの（ための）哲学（P 4 C）プログラムの一環として、マシュー・リップマンによって独自に展開された固有の教室の方法論であり、そしてそれは生徒たちを哲学的問題に関するクラス全体のディスカッションに巻き込む。P 4 Cは、生徒たちに哲学の多くの伝統的「大問題」を紹介し、それを探求できるようにすることを通して、生徒たちの思考を向上させることを意図している。そのプログラムを使うことで、教師は教室での探求の共同体において、学校の勉強の背後にある考え（ideas）について生徒たちがより深く考えるように仕向ける。生徒たちはそこで、哲学的なあるいはその他の難問に対する自分の考えや他人の考えを探究し高めるうちに、自らの思考やスキルに反省的に焦点を合わせ、したがってそれらを向上させるだろう。こうした考えの共同構築は、グループ内でのより結束した間主観的知をもたらす。

リップマンは探求の共同体に明らかに哲学的な問いを探究させようとしたが、探求の共同体はそれ自体で強力な方法論であり、他の学問分野への適用が可能である。しかしながら、その方法論が促進する探求では本性的に、ディスカッションが、対象となる学問と哲学—それはあらゆる学問の基礎にある—との間の境界をしばしば横断するだろう。

探求の共同体は、生徒たちが知識と思考能力を共同体の内部で作り上げることができるという考えに基づいている。教師の役割は、棒暗記するよう生徒たちに知識を供給することではなく、思考の熟達者（an experienced thinker）のモデルをそのクラスの思考の初心者に提供し、思考のレベルが高く保たれるよう保証することである。生徒たちは、自分たちの興味をそそる問いを出し、議論される事柄が自分たちのニーズと能力に適していて、生徒の問いが大切にされることを確かめながら、ディスカッションの議事事項を定める。思考は豊かな文脈のうちでなされる、つまり参加者によって適切と判断された多様な文脈に、思考の技術を繰り返し、移行の見込みを高めながら適用していくことでなされる。このモデルは、考えを適切に探求するための時間を作り出しつつ、生徒たちに会話の進行をまかせる。

P 4 C プログラムでは、探求の共同体は一般に意図のある物語を用いて、自分たちの探求

の共同体を創ることに従事する生徒の集団を学校内外で生じさせる(present)。その物語には、しばしば哲学的な、難問が埋め込まれている。この物語はマニュアルによって支えられ、そのマニュアルは教師が適切に用いるために哲学的問題を印し、ディスカッションの計画、練習課題、予備的注釈を提供する。しかしながら他のきっかけとなる材料(trigger material)が使われるかもしれない。例えば絵本や小説、映画、新聞記事といったものが、ただし見込みある「かぎ(hooks)」を含んでいるという条件で、使われるかもしれない。

たくさんのバリエーションと適応が可能ではあるが、典型的な探求の共同体では、物語がグループ共同で読まれる。そしてそれについて生徒の問いが集められ、面前に(publicly)書き出され、ディスカッションが始まる。ディスカッションを築く上で教師の役割は欠くことができない。生徒たちはお互いを見ることができるよう輪になって座る。きっかけとなるもの(trigger)は、探求への共同のコミットメントを打ち立てる重要な手段である。もし物語であれば、生徒は「パス」と言って見送るのを選ばない限りそれぞれ一段落を読みながら、クラスで物語は読まれる。

明らかに、探求の共同体は多くの強み(strengths)を持つてはいるが、教室内部で用いられる唯一の方法論ではない。良い指導というのは、授業の目的、目標に適した様々な方法を思慮深く混合したものを必要とする。それにもかかわらず、探求の共同体は、多くの教室で一般に無視される領域に焦点を当てる。

教師の事前の準備 教師は、ディスカッションのリーダーとして、きっかけの経験にある様々なかぎから生じうるディスカッションの発展の複数の道筋を、たとえ生徒がどんな道筋を選ぶか定かでなくても、前もって考えておかねばならない。これは、生徒の言う意見に潜在するものを特定する上で助けとなり、それらの意見の発展を手助けする正しい仲立ちを示唆しうる。もちろん、議事事項は生徒たちによって設定され、ディスカッションの実際の方はそれ自身の原動力から生じるので、依然として「当意即妙に考える(think on your feet)」必要がかなりある。

探求の共同体を運営する

一度きっかけとなる材料が提出されたら、探求の共同体は始まる。その方法の主な特徴は以下の通りである。

1. 物語やその他の経験について生徒たちがおもしろいと思ったり、頭を悩ませられたりしたことを尋ねる。彼らが自分のコメントを問いの形にするよう仕向ける。ボード上に生徒たちの問いを集め、問いの後にそれぞれ尋ねた生徒の名前を書く。
2. 様々な方法の一つにより決められた順に、問いについてディスカッションする－例えば、

最もおもしろい問いに投票したり、主な関心領域を見るために類似の問いをまとめて分類したり、私たちの持つ証拠にもとづいて容易に答えられたり、答えるのが不可能な問いを取り除くなどするかもしれない。

3. ディスカッションのルールは、その共同体によって、事前にもしくは共同体の何らかの経験の後に、決められる。例えばあるクラスでは、最初のディスカッションの前に共同体によって5つのルールが決められた。その5つのルールというのは、共同体に向けて話をしていないときは静かにする、一度に話すのは一人だけ、話に耳を傾ける、ふざけない、話すときは大きな声ではっきりと話す、である。

4. 教師の役割はファシリテーターである。基本的には、それは思考の熟達した人が自分の最前の思考においてつくる動き (moves) を引き起こし、形作ら (model) なければならない。そして知識の源泉として、また生徒の答えを即座に評価する人としての教師の一般的な役割を避ける (共同体がこれらの役割を引き受ける)。ここでの主なテクニックのいくつかは、待ち時間を増やして利用すること、判断を含むコメントを避けること、教師の困惑を示すこと、次に有効になされるかもしれない認識の動きを合図して生徒の注意をメタ認識 (自らの思考についての思考) に集中させる質問を思慮深く用いること、である。

5. 共同体を打ち立てる際に円になるという物理的セッティングの影響力は、参加者がいつも教師を通して話すのではなく、むしろ円全体に話すか、あるいは自分が答えている相手に直接話すよう仕向けることで強化される。話す前に手を挙げるよう要求することが、特に新しくできたグループでは必要でありうるが、交替で話すスキルをのぼすことがもちろん教師の目的なので、ディスカッションはより通常の対話の原動力に従う。一度に話すのは一人だけと要求する前に、騒がしいやりとりが続くのをどの程度許すかを決めるのは、教師の主な判断の一つである。

6. 教師は共同体の一員であり、したがってディスカッションに参加する義務がある。しかしながら伝統的な教師の役割が意味するのは、教師による情報は生徒たちの寄与よりも重みがあるということだ。したがって、適切な促しや所定の時間で生徒たちが好ましい答えを思いつくかもしれない良いチャンスがある場合は、事実や意見に関して教師は控えるのが重要である。リップマンはしばしば、教師は「教育学的には強く、哲学的には控えめ」であるべきだと言う。もちろん教師の情報がディスカッションにとって必要なものであるときもある。これをいつどのようにするかを決めるのは、教師のプロフェッショナルな判断の一部をなし、グループの知識や関わっている問題の事前の考慮によって導かれる。しかしながらそれはいつも独断的な形の発言である必要はない。

7. 教師は、多くの問いが入り組み、単純にすぐ答えることはできず、だから問題についてあれこれ話すことに時間が与えられなければならないという共同体における認識へと仕向ける必要がある。たとえ答えが見つからなくても、問題を明らかにすることは価値あることとして認識されなければならない。問いが早まって終結してしまうのは避けられるべきである。

8. 生徒たちは、自分のコメントに責任を負い、それを適切に弁護し、修正し、変更する用意のあるよう仕向けられなければならない。教師は、立場（positions）への攻撃が、その立場をとる人（holders）への攻撃としてなされたり見なされたりしないよう保証する必要がある。